

門部王の詠物二首について

影 山 尚 之

一

門部王詠東市之樹作歌一首 後賜姓大原真人氏也
東市之殖木乃 木足左右 不相久美 宇倍戀尔家利

(3・三一〇) ∴ A

門部王在難波見漁父燭光作歌一首 後賜姓大原真人氏也
見渡者 明之浦尔 燒火乃 保尔曾出流 妹尔戀久

(3・三二六) ∴ B

引用は小学館新編全集『萬葉集』による。西本願寺本はか仙覚系諸本にあつてはA歌第五句「宇倍吾戀尔家利」、B歌第二句「明石之浦爾」とするが、近時は非仙覚本に基づく校訂が支持される。

まずは両歌に関する土屋文明『萬葉集私注』の評を参看したい。

A：此の歌は詠物の作であるから、「うべ戀ひにけり」も植木を戀ふるのであらうと言ふ説もあるが、歌の趣はさうではない。上の句は第四句の修飾である。尤も當時すでに詠物なる作風が行はれて、此の歌もその一體として作られたものかも知れないが、作者はそれに戀愛の意味を持たせかけて一首を

まとめたものであらう。切實な感動のないのは其の爲かも知れぬ。

B：此の一首の内容は相聞即ち戀愛歌であるが、題詞によれば、難波にあつて漁父の燭の光を見ての作であるといふから、その序の部分が作者の實際経験であることが知れる。(…(中略)…)傳へるままに従へばさうした單なる自然の景色を、すぐに戀愛感に結びつけて表現するという技巧が、既に存在したものと云ふことが出来る。そこには生活の衝迫があつたといふよりも、單なる技巧的結びつきで一首をなして居るのである。謂はば作歌が遊戲的技巧になつて居るのである。さういへば此の作者の(三一〇)の作も、さうした動機からの作と見るべきかも知れぬ。彼の作に對してはそのことを寧ろ反對に考へたのであるが、此の作を見るに及んで少しく其の考へは訂正を要するかも知れぬ。

『私注』がしきりに懸念する、二首の下句に詠出された愛情が表現者に実感的に抱かれているかどうか、については現時点ではやや問題にする必要がないけれども、二首の題詞がともに「詠」「見」の下に詠題となる対象物を明示しながら、あくまでその対象物を契

機の位置にとどめて歌文を恋情に収束させる顕著な共通性には注意しなければならぬ。澤瀉久孝『萬葉集注釋』に、

同じ門部王の東市の木を見ての作（三二〇）も眼前の景物に接して思ひを述べた點は同じであり、何か相通するものがあり、共に同人の作と見るべきかとも思はれる。

と言及するのもその点をとらえてのことである。もちろんこのような詠題と歌の主情との間に生じるある種の齟齬・不調和は、

同坂上郎女初月歌一首

月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く恋ひし君に逢へるかも

（6・九九三）

大伴家持石竹花歌一首

我がやどのなでしこの花盛りなり手折りて一目見せむ兒もがも

（8・一四九六）

宴席詠雪月梅花歌一首

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて送らむ愛しき兒もがも

（18・四一三四）

右一首十二月大伴宿禰家持作

見漁夫火光歌一首

鮎突くと海人の燈せるいざり火のほにか出ださむ我が下思を

（19・四二一八）

など家持とその周辺に広く見出されるのであり、A・B歌に突出した個性とは見なしたがたいが、『私注』をして「切實な感動のない」「生活の衝迫」不在の作と言わしめた、いうならば具体的対象に収束しない恋情が、おそらく接近した時期に同一作者によって詠出されていることの意味は小さくない。^{（注）}表現史的観点に立つときには、家持

周辺に試みられるこうした詠風の先蹤に門部王作歌が位置するといふ評価を与えることも可能だ。

以下に若干の検討を加える所以である。

二

A歌下句が恋の話題に収斂することにつき、西宮一民氏『萬葉集全注卷第三』は、

市は人の集まる処で、歌垣も催され、異性に逢う機会が多かつたから、それにふさわしい相聞歌的内容に構成したものである。

と述べ、B歌の恋情の質について岸本由豆流『萬葉集攷證』の「故郷の妹を戀る思ひの、穗にあらはれぬと也」とする解を伊藤博氏『萬葉集釋注二』に、

上三句では旅先の物に、下二句では故郷の妻に氣を使っているわけで、一首の中に旅の歌の作法を封じ込めたもの。

と敷衍するが、いづれにも従うことができない。東の市の殖木から歌垣にまで連想を延ばすのは距離が遠すぎるし、「ほにそ出でぬる」が示唆するのは、類似する表現の、

石上布留の早稲田の穗には出です心の中に恋ふるこのころ

（9・一七六八）

言に出でて言はばゆゆしみ朝顔の穗には咲き出ぬ恋もするかも

（10・二二七五）

秋萩の花野のすすき穗には出です我が恋ひ渡る隠り妻かも

（10・二二八五）

はだすすき穗には咲き出ぬ恋を我がする玉かざるただ一目のみ

見し人故に

(10・二三二)

などから看取されるように、自身の胸の奥深くに潜ませる秘めた恋であつて(波線部)、家郷に残した妻への思慕とは異質である。

とはいえ、山田孝雄『萬葉集講義』が「題詞にわざと「詠」とかきたれば、これは如何にしても相聞のうたにはあるべからず」の認識のもとに「これも市之樹を戀ひつつありしが、今見れば云々といひてうたへるものなり」と主張したところが当たらないのは前引『私注』の言うとおりである。他に例を見ない景「東の市の殖木」がA歌にうたわれる点を注視するなら、それが予め用意された歌題であつた可能性がきわめて大きく、「詠・作歌」と詠物への志向を几帳面に記した書式は、その逆の判断——詠歌内容にあわせて題詞を後補したという把握——を許容しない。当該題詞は、門部王自身の筆録であるか否かは留保するとしても、作歌時点の環境を正確に伝えていると判断できる。門部王はその題を踏まえて構想し、「市の殖木」を詠題のとおりに詠み込んでその「木足る」さまを讚美的に描くと同時に、それとは大きくレベルの違う恋情をあえて一続きの文脈内に定位したのである。

茂岡に神さび立ちて榮えたる千代松の木の年の知らなく

(6・九九〇 紀鹿人)

一つ松幾代か経ぬる吹く風の声の清きは年深みかも

(6・一〇四二 市原王)

我が命を長門の島の小松原幾代を経てか神さび渡る

(15・三六二 遣新羅使人)

磯の上のつままを見れば根を延へて年深からし神さびにけり

(19・四一五九 大伴家持)

樹木の詠題が期待させる一般的構想はおおよそ右の範囲であり、A歌上句は第三句の意を「木―垂ル」「木―足ル」のいずれに受け取るにせよ樹木の成長・繁茂を称賛していようからこの枠内に収まるが、下句は明らかにそこから逸脱している。

右と同じ検証をB歌にも施しておこう。題詞「見漁父燭光」がB歌上三句に過不足なく詠み込まれている点は明瞭であり、下句への展開のありようもA歌に等しいことを再度確認したうえで、「漁父燭光」の詠題に符合する内容を集中に求めれば、

紀伊の国の雑賀の浦に出で見れば海人の燈火波の間ゆ見ゆ

(7・一一九四)

山のはに月傾けばいざりする海人の燈火沖になづさふ

(15・三六二三 遣新羅使人作者未詳)

のような旅情・旅愁を主題とした内容がまず想定され、さらに、

飼飯の海の庭良くあらし刈り薦の乱れて出づ見ゆ海人の釣舟

(3・二五六 柿本人麻呂)

海人娘子玉求むらし沖つ波恐き海に舟出せり見ゆ

(6・一〇〇三 葛井大成)

海人娘子いざり焚く火のおほほしく都努の松原思はゆるかも

(17・三八九九 作者未詳)

などをその範疇に含むと認められるのであり、こうした文脈から「妹」への恋を導くのは少なからず飛躍があると言わねばなるまい。もっとも、卷十二羈旅発思中の、

能登の海に釣する海人のいざり火の光にいませ月待ちがてり

(12・三一六九)

志賀の海人の釣り燈せるいざり火のほかに妹を見むよしもが

も

(12・三一七〇)

あるいは寄物陳思に分類される、

すずき取る海人の燈火よそにだに見ぬ人故に恋ふるところ

(11・二七四四)

を視野に収めるときには、「海人のいざり火」「燈火」と異性への恋慕とがさほど隔絶してはいないことが了解できるものの、右諸例は恋情を表出するための序としてそれぞれの景が選択されているのであって、B歌と連続した発想基盤に立つとは言いながら発想の方向を逆にとる点を見届ける必要がある。当該B歌と同様に恋慕の情を引き込む詠物歌としては前引した家持四二一八「見漁夫火光歌」がわずかな例外である。

三

A・B両歌の構想の共通性を右のように確かめれば、それぞれの題詞「東市之樹」「漁父燭火」の際やかな対照を偶然と扱うことはむしろ不自然だ。いずれも四字句への規格化を経ており、前者は平城京に属する近景を、後者は旅先・難波に属する遠景を詠題とする点において対比的である。両歌の詠作時期は、配列上おおよそ萬葉第三期を示す位置に置かれていること以外に限定できないが、三一七歌から三二五歌までが山部赤人・高橋虫麻呂関係歌の一括掲載となつてゐる様態を勘案するかぎり、大きな時間差が横たわるとは考えにくく、題詞・歌内容を含めてあたかも同一工房の鋳型に出るかと思わせる二首は直接的な関係に結ばれていると見るのが穏やかであろう。少なくともA・B歌が等しい詠歌環境のもとに生成してい

ることは疑えない。この作者の風流侍従としての経歴をここに思い合わせておくことも不当ではあるまい。

「漁父燭火」については若干の考慮を要する。萬葉集中に「漁夫」の語は八五三歌序、三九六一歌左注、四二一八題（前掲）および憶良・沈痾自哀文の計四例を見るものの、「漁父」は当該例のみ、「燭火」も二七四四歌文に用いられるだけで題詞中の使用例はほかにない。ともに漢語として珍しくはないが、「漁父」からは誰もがまず楚辭や史記また文選に収められる屈原の故事を想起するはずだ。

『注釋』が和名抄「楚辭云、漁父鼓枻而去、漁父一云漁翁〔無良岐美〕」を引きながら「単に漁夫、漁人の意にも用ゐられ、今も海人といふに等しい」と注するのは不安がある。この語にアマの訓を与えるのはよいとしても、「漁父」の文字列が採用される点を看過するべきではない。

屈原既放、游於江潭、行吟澤畔。顔色憔悴、形容枯槁。漁父見而問之曰、子非三閭大夫與。何故至於斯。（文選卷二十三）

屈原が放逐されて江潭に遊び漁父と邂逅する、よく知られた一節である。もとよりこれがA歌題詞の直接の典拠であるとは断じられないけれども、この故事において辺境の水辺に舞台が求められる点と、B歌に「明石の浦にともし火」が描出される点との間に何ほどの連絡があると予測することは許されるだろう。

井上通泰『萬葉集新考』は「明石の漁火浪華まで見ゆべくもあらず。ただ遠方に見ゆる漁火をおしあてに明石の浦のと定めたるにて」と述べて、

住吉の得名津に立ちて見渡せば武庫の泊まりゆ出づる舟人

(3・二八三 高市黒人)

に同じいとし、西宮氏『全注』は、

これは言うまでもなく見えない。が歌として、難波から見はるかす漁火を、歌枕的な意識によつて「明石の浦」の漁火と表現し、それほど「明し」（明瞭だ）という意味を響かせているのである。明石は見えなくても、明石の漁火でなくてはならなかったのである。

と読解を深化させるが、難波周辺の漁り火をあえて視界から外し「明石の浦」を点描する発想の違和感が右の説明によつてすべて解消するとは思えない。なるほど明石が畿内外の境界として都びとの意識中に固定されていたことは認められるものの、明石と「漁火」との取り合わせが歌枕と認定しうるほどに定着しているとは見なしがたく、集中にその両者を結びつけるものは、

燈火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず

(3・二五四)

の一例しかない。

見える見えないの論議に加わるよりも、いまは「在難波」の情報自体が設定された条件であると把握するほうが建設的であろう。所与の題を的確に受け止めたいうえでいかに巧みな構想を提示するか、の機知が詠物において試される課題であるとするなら、そもそもB歌が実景をうたっているという前提に立つ必要がない。門部王の意図を付度すれば、摂津・難波を起点にして同国内のもつとも遠い地点を「見渡」すとうたい、聴き手（読者）の意表を突くねらいがあったのではないか。そしてその予想外な発想を誘発する要因が漢語「漁父」の語性に内在するのだと小稿は考えたい。屈原の故事に直結するのではなくとも「漁父燭火」が門部王に辺境のうらぶれた風景

の着想を与え、それに適合する景として「明石の浦にとす火」が選ばれたということだ。実景としての海人であれば難波の海に多数舟を浮かべていようが、年老いた漁父の燭火は都を遠く離れた海辺こそが似つかわしい。

難波潟潮干に立ちて見渡せば淡路の島に鶴渡る見ゆ

(7・一一六〇)

見渡せば春日の野辺に霞立ち咲きにはへるは桜花かも

(10・一八七二)

見渡せば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき誰が妻

(20・四三九七)

集中に多用される「見渡せば」の表現は、主体の視界に入る対象物が現実に見えるか見えないかは別にして——をとらえ、その対象物が主体にある種の感懷を抱かせるという文構造を通例とするのであり、初句にこれを据える一首はそうした趣旨を強く期待させる。

ところがB歌は「在難波」の条件下では容易に視界に入りそうもない対象物を提示する点でまず通例に背き、さらに下句に予想外の恋情を展開させるため、二重に期待を裏切る次第となる。結果として「在難波見漁父燭光」の詠題に正しく整合するように見えながら不調和をも抱え込む清新な作が将来された。

A・Bの僅か二首を観察しただけだが、こうした意外性ある展開を提供する点に門部王の詠物歌の特質があると認定してよいのではないか。再三参照した四二一八歌につき「注釈」が「門部王の作によつたものであらう」とした判断は正当で、門部王の知性の踏襲を家持が志向するのは理由のあることである。

四

卷四所収「門部王恋歌」への見通しを立てて稿を閉じる。

門部王恋歌一首

餂宇能海之 おうのうみの 塩干乃箇之 しほのかたの

片念尔 かたもちに

思哉将去 おもひやゆかむ

道之永手呼 みちのながてを

(4・五三六)

右門部王任出雲守時娶部内娘子也

未有幾時

既絶往

来 累月之後更起愛心

仍作此歌贈致娘子

右を組上に載せた新谷秀夫氏は、一首が「恋を主題とする歌」であつて「左注で語られるような事實は存在しなかつた」と判断したうえで「当該歌の左注は、娘子をめぐる門部王の恋として歌語的に伝誦されながら享受されていたものがのちに記載されたと見て大過ない」と述べる。「伝誦」の認識を除けば大筋において首肯してよい見解である。小稿の趣旨に即して言い換えるなら、一首はそもそも具体的対象を持たない、実態のない恋を詠じたものであつて、左注がそれに実態を付与したということだ。もつとも、新谷論は左注に記す「任出雲守時」をも存疑とし、「いまひとつの歌(卷三・三七一)」で詠んだ出雲の地名をふまえて、都などで詠んだ歌であつてもけつしておかしくない」と述べて現実の詠作事情に踏み込もうとするが、題詞・左注に高度の加工を施した作品から詠作時点に遡源する手段はない。左注に展開する逸話が実在の門部王の経歴とは等号で結ばれず、歌の表現内容から抽出される印象のほうに濃厚な一致点を持つことを確認しておけば足りる。

五三六歌が本来実態のない恋をうたつたものであるなら、小稿に検討を加えたA・B歌との質の近よりをたやすく見出すことがで

き、門部王のかかる詠風が和歌説話の形成を促したという推測も成り立つかもしれない。風流侍従と卷十六所載和歌説話との親縁性については別稿に指摘したことがあるが、それとの関連においても門部王作歌にはさらに注目する必要がある。

注

- 1 同時代に二人の門部王が存在することは周知だが、小稿ではその考証に取り組むことをせず、A・B歌題詞脚のほかに三七一歌題詞脚および一〇一三歌左注下の書き入れをひとまずは認める。すなわち、続日本紀天平十一年夏四月甲子条に大原真人姓を賜つた高安王の弟であり同書天平十四年四月戊戌条「授従四位下大原真人門部從四位上」と見え本朝皇胤紹運録に川内王の子、長親王の孫と位置づける、家伝下に「風流侍従」の一人とされる人物に相当すると考えておく。関連論考に澤瀉久孝「万葉作者樸考」(『万葉の作品と時代』岩波書店、昭和16年)、黛弘道氏「万葉歌人「門部王」小考」(『論集上代文学』第八集、笠間書院、昭和52年)がある。
- 2 この書式に関しては山田「講義」が「詠」の集中全用例を挙げて詳細に検討し、「詠」を題にもつものが「支那に所謂詠物の體にして、いづれもある外物をとりて、それを客觀としてうたへるもの」であることを論定している。近時の校注書では岩波新大系『萬葉集』に「題詞の「詠みて作」という形式は珍しい」の言及がある。
- 3 『萬葉代匠記』が「木垂ナリ」を主張し、『萬葉考榧落葉』に

「木の年ふりて、枝葉の足れるをいふ」として以来、この語の理解は対立して現在に至るが、『時代別国語大辞典上代編』に「木足」を正字とみて、樹木の枝葉の充足している意に解すべきである」とするのが的を射ていよう。いずれにせよ平城京東市が設置後一定の年数を経ての情景を描写した表現と見られ、的確な題の取り込みが認められる点に注意しておきたい。

4 10・一九一三歌のように恋歌の序に用いられて当該歌と近い文構造の例も見られる。

5 新谷秀夫氏「門部王の「恋の歌」を読む」(『高岡市万葉歴史館紀要』第15号、平成17年3月)

6 影山尚之「風流の系譜と万葉集―市原王を中心に―」(『万葉集の今を考える』新典社、平成21年)

(かげやま・ひさゆき 本学教授)